

コミュニティーの未来を考える

開倫塾

塾長 林 明夫

Q：最近読んだ本で面白かったのは何ですか。

A：（林 明夫・以下略）フランシス・フクヤマ氏の書かれた「大崩壊の時代」（上・下）2000年7月31日早川書房刊です。氏はラルフ・ダーレンドルフの言葉をかりて、「個人主義の蔓延（まんえん）」を次のように説明しています。

「伝統的な社会には選択肢がほとんどない一方で、多くの絆（すなわち他者との社会的なつながり）がある。人々は、結婚相手も仕事も、どこに住むかも何を信仰するかも、自分の好みでは決められない。そして、家族、人種、階級、宗教、封建制度の義務といった、まずさからえない絆によって拘束されている。これが現代社会だと個人の選択肢は大幅に広がる。そして同時に、複雑にからみあう社会的な義務に人々を縛りつける絆は大幅にゆるめられる。

非常に楽観的な見方をするなら、近代生活では絆がすっかりなくなるわけではない。ただ、世襲の社会階級、宗教、ジェンダー、人種、民族といった要因に押しつけられる絆や義務にかかわって、今度は、自発的に引き受けた絆ができるわけだ。（中略）親ではなく、子供が自分で結婚相手を決められる。ある意味でインターネットなどは、個人が社会的な絆を自ら選び取れるテクノロジーの代表だとも言える。しかも、これは夢にも思わなかった範囲まで幅を広げてくれる。」

しかし、「この楽観的な見方の問題点は」（中略）「絆の消滅は、伝統的な社会や権威主義の社会に見られるような強制的なものだけにとどまらず、近代社会ならではのまったく自発的な制度を支えている社会的絆にまでおよんでしまうのである。それゆえに、人々は独裁者や高僧にかぎらず、民主的に選出された役人でも、科学者でも、教師でも、あらゆる権威を疑問視するようになる。自らの意見で結始し、家族をもったにもかかわらず、それゆえに課される拘束にいらだちを覚える。どんな宗教でも好きなときに入信し、好きなときに脱会できる完全な自由があるにもかかわらず、自分で選んだその宗派の道徳的な教えにあまり制約されることを好まない。近代社会の根本的な美德である個人主義は、自由な人間の誇らしい自立を意味していたのに、いまや一種の自閉した身勝手さへと変貌（へんぼう）しつつある。他者への責任を考慮することなく、個人の自由を最大限に追求することが目的そのものになってしまったのだ。

個人がかつてないほどに選択の自由を満喫できる社会にあると、人々は少しでも自分を拘束するものに腹を立てるようになる。そうした社会の危険性は、人々がふと自分は社会的に孤立した状況にあると気付くことである。誰とでも自由につきあうことはできるが、道徳的な責任を負おうとしないから、本当の意味で他人と結びついてコミュニティーを形成することができないのだ。1990年代に浮上してきた社会資本についての議論は実利的な目的のためにも、崇高な目的のためにも人々を結束させて、集団行動を起こさせるような絆を押しつけられてではなく、自発的につくって維持していけるかどうかの議論にほかならない。」（以上は同著71～73ページよりの引用）

Q：フランシス・フクヤマ氏の結論は何ですか。

A：「道徳のミニチュア化」であるとフクヤマ氏は言っています。「人々はあいかわらず集団に参加しているが、集団そのものが権威的な力を弱めて信頼の範囲をせばめているのだ。つまり、全体と

して社会全体で価値観を共有することが少なくなり、集団同士の競争が激しくなっている。」(同著 74 ページからの引用)

Q：規範意識を考える上で面白い見方ですね。他に、何か参考になる本はありませんか。

A：マービン・トケイヤー氏の「ユダヤ商法」加瀬英明訳 2000年9月19日 日本経営合理化協会出版局発行は、フクヤマ氏とはがらりとちがったものの見方を示し、面白く、ためになりました。

「今日(こんにち)、ユダヤ人は、全世界を見渡しても、わずか、1480万人、全世界の人口60億のわずか0.25%しかない。それにもかかわらず、^{ビジネス}商売の世界をはじめとして、^{きらぼし}抜きん出た人材を満天に輝く^{きらぼし}綺羅星のごとく送り出している。(中略)ノーベル賞を例にとると、20世紀がはじまった1901年から1994年までの間に663人にノーベル賞が授けられているが、このうち140人がユダヤ人である。つまり

ノーベル賞受賞の21.1%がユダヤ人であった。人口比からいえば、ノーベル賞を一つもとらなくてもおかしくないはずである。(中略)

ユダヤ商法とは、ユダヤ5000年の途方もなく永い、しかも極めて特殊な歴史の中から生み出されたものである。

われわれユダヤ人は遠く紀元前3000年もの昔から独立民族として存在したにもかかわらず、紀元70年に最後のユダヤ王国をローマ軍によって滅ぼされてから1948年のイスラエル建国までの1878年もの間、国を失い^{るろう}流浪の民として世界に四散し、安住の地を得ることができなかった。

そして、その土地、その土地において、古くは^{せんみん}奴隷や賤民として生きることを強いられ、中世にいたっても、いつも不当な^{べっし}蔑視と差別の中で、ユダヤ民族であるがゆえに、ようやく身につけた財産一切を^{はくだつ}剥奪され、永く住みついた土地を追われる迫害を受け続けた。いうなれば、ユダヤ民族そのものが、いつ何時地球上から消滅してもおかしくなかったのである。

それにもかかわらず、われわれは迫害を受け追放されるたびに、新たな見知らぬ土地で、自分の力だけを頼りに^{ぎょう}業を起し、したたかな民族として生き残ってきた。

いわば「ユダヤ商法」の本質は、ユダヤ人がもっている、恐るべき逆境の中から業を起すという根源的な力のことをいうのである。その力とは何なのか(以上同著「はしがき」より引用)

Q：なかなかおもしろそうですね。「その力とは何なのか」かいつまんで説明して下さいませんか。

A：ユダヤ5000年「成功の秘訣」は、ユダヤの聖典「タルムード」を生涯にわたって深く学び考え続けることだそうです。「何千年もの間、国家をもたず世界に四散していたユダヤ人にとって、自分一人の力だけがすべての財産であった。ユダヤ商人の根源的な力、ユニークな創造力は、なによりも自分を創造することによって身につけたのである。それを支えているのは、ユダヤ5000年の歴史に裏打ちされた伝統であろう。永い歴史に培(つちか)われたユダヤ人独特の伝統が成功率の高いユダヤ人商法を生み出したのである。」(同著3ページより引用)

「タルムード」をテキストにユダヤ商人は次のことを十戒にしています。

ユダヤ商法十戒

- 第一戒「正直であれ」 ●第二戒「好機をとらえろ」 ●第三戒「生涯にわたって学べ」
- 第四戒「時間を貴べ」 ●第五戒「笑え」 ●第六戒「使命感をもて」
- 第七戒「過去から学べ」 ●第八戒「話す倍聴け」 ●第九戒「弱者に施せ」
- 第十戒「家族を大切にせよ」

Q：ユダヤ商人は「絶対的な価値基準」を「タルムード」に求めて生き続けたのですね。フクヤマ氏の文と対比すると興味深いですね。まだ他に、最近お読みになった本で面白いものはありますか。

A：話がここまできたら、小室直樹著の「日本人のための宗教原論」2000年6月30日 徳間書店刊を紹介せざるを得ません。私は小室直樹氏の著書を今まで10冊以上読んだことがあります。何故か、この本は小室氏の中で最もわかりやすく、最も興味深く、何回も読んでしまいました。私自身、宗教についての関心や知識があまりにも少なかったからかも知れません。

「キリスト教」「仏教」「イスラム教」「儒教」の4つの宗教について、どのような経緯で成立し、どのような教義が根本にあるのかを、わかりやすく説明。もしかしたら、「宗教理解のための第一級の解説書」かも知れません。

「キリスト教の『愛（アガペー）』は誠に驚くべき教義である。それは何千年ものイスラエルの宗教が登りつめた『苦難の僕（しもべ）』の説教から発生した。そして、全世界を包み込むほどのエクスタシーを発散し、資本主義とデモクラシーと近代法を生んだ。

仏教の『空（くう）』は、人類が到達した最深、最高の哲理であろう。それは、形式論理学、記号論理学をも超越している論理を駆使していることが、最近明らかにされてきた。『空（くう）』は、最近の社会科学、自然科学を比喻として用いるとき、初めて鮮明に理解されるであろう。

イスラム教は、キリスト教が未発達のまま残した不完全な教義を補って完全なものとした。イスラム教では、仏教、儒教、キリスト教とは違って、ユダヤ教徒と共に宗教的戒律、社会規範、国家の法律とが全く同一である。このことは、最高の連帯（ソリダリテ）は何であるか、アノミーを防ぐためには如何にすればよいかを教えてくれる。しかも、この完璧性こそが近代化を阻んだ。近代化への疑問が噴出して来る昨今、イスラム教の二面性は大きな示唆を与えることになる。

儒教が本当に日本に入ってきたのは、戦後、特に昭和30年代である。科擧かきよと同型の受験地獄によって日本の教育は崩壊し、官僚制が人治に墮したからである。儒教の誤解によって、ことここに至った。」（同著4ページからの引用）

Q：なかなか厳しい指摘ですね。何のために小室氏はこの本を書いたのですか。

A 現在の日本、裁判所で係争中の宗教団体を含めて「どの宗教が本物か偽物かがわかってくるようになるであろう。どの宗教があなたをどう救えるかについても考えられるようになることだろう。現在、日本が直面している諸難問にどう対決するかについての示唆を与えることであろう。」（同著5ページからの引用）ことを目指して、書かれたものと思われま。

Q：最後に一言どうぞ。

A：子供をもつ保護者の、学校の先生にしてもらいたいことのNo.1は、『『善悪の判断基準』を子供に教えてあげてほしい』だ。これは何がよいことで、何がよくないことかを子供に示せない保護者が多いことを意味する。学校は学校で「それは家庭のしつけの問題で」と本気になって取り組まない。「子曰、不教而殺、謂之虐」「子の曰（のたま）わく、教えずして殺す、これを虐ぎやくと謂う。」「先生は言われた、教えもしないで殺す（道徳教育もせずにて、罪を犯したからといって死刑にする）ことを虐むごいという。」〈以上「論語」（金谷治訳注）1999年11月16日改訳 岩波文庫 岩波書店刊 399～440ページより引用〉。

秋の夜長に、何冊かの本をお読みになり、物事を深く静かにお考えになられますように。

2000年10月12日記